

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 1日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520342

研究課題名（和文） 閑適と飄逸のタオイズム

研究課題名（英文） Leisure（閑適）and Happy-go-Lucky（飄逸） in the Taoism

研究代表者

砂山 稔（SUNAYAMA MINORU）

岩手大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：00091702

研究成果の概要（和文）：研究成果としては、李白の女性観を考察した論文と、李白と白居易の詩の日本文学への影響を考察した論文を発表した。李白と白居易は、また、『莊子』の思想から大きな影響を受けていることは周知の通りであるが、この『莊子』に関する著作の書評と、タオイズム、即ち道教の世界に関する著作の書評を公刊した。また、現在、白居易と李白の道教思想と鶴に関する論文、白居易の道教思想全般を見渡した論文の草稿を執筆しているところである。

研究成果の概要（英文）：In this research activities, I published two papers and two book reviews. In one paper, I considered the view of womanhood of Li Po(李白). In another paper I considered the influence of Li Po and Po Chü yi（白居易） on Japanese literature. As generally known, Li Po and Po Chü yi are affected by the thoughts of Chuang Tzu(莊子). I reviewed the book on the thoughts of Chuang Tzu. And I reviewed the book on the Taoist World. At present I am writing two papers. In one paper, I write on the crane and Taoist thoughts of Li Po and Po Chü yi. In another paper, I write on Taoist thoughts of Po Chü yi on the whole.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：白居易 李白 閑適 飄逸 白鶴 黄鶴 養生 天尊

1. 研究開始当初の背景

この研究計画は、白居易と李白という唐代の二人の代表的な詩人の思想の考察を通じて、漢民族の民族宗教である道教がいかなる相貌を有する宗教であるかを把握

しようとする試みでもあるとも言えるのであるが、その研究の学術的背景は次の通りである。

最近発表された横手裕氏の「道教思想史

研究をめぐって」(『中国—社会と文化—』2007 所収)では、中国の研究動向について「中国(大陸、台湾)についても同様の要領で眺めてみたい。まず、盧国龍『道教哲学』(華夏出版社、一九九七年)は、南北朝から隋唐を中心としたその前著『中国重玄学』(人民中国出版社、一九九三年)を基に、先秦から金元まで論述を拡大したものである。盧氏の研究は、道教思想の真骨頂は「重玄」思想にありという印象を与えるが、その後の大陸の研究者の多くが同様の感覚を持っているように感じられるので、その影響力は相当に大きいように思われる。」と述べている。

ここに見られるように申請者が吉岡義豊氏の『道教と仏教第一』、『道教と仏教第二』、大淵忍爾氏の敦煌道経の研究、呉其昱氏の『本際経』の研究、藤原高男氏の「老子解重玄派」の研究、鎌田茂雄氏の『中国仏教思想史研究』等の成果を踏まえて、拙著『隋唐道教思想史研究』で展開した道教重玄派の指摘や『本際経』『海空経』の研究は、国内外で一定の支持を受け、特に中国では高い評価を得ていると考えている。その顕著な例は、碩学任継愈先生主編の『中国道教史』第六章「隋唐道教“重玄”哲学」の記述、盧國龍氏の『中国重玄学』における『本際経』の研究、興膳宏氏の「初唐の詩人と宗教—盧照鄰の場合—」等である。また、『隋唐道教思想史研究』で展開した中晩唐時代の茅山派道教と韋応物、李徳裕との関係の考察は、例えば孫昌武氏の近著『道教与唐代文学』等でも支持を受けている。

しかし、一方で最近の例として、例えば、小林正美氏の『唐代の道教と天師道』や葛兆光氏『屈服史』では、申請者の道教重玄派の指摘に対する批判も出されている。小林氏に

対する反論は、先頃(2006年)に堀池信夫氏との共編で出版した『道教研究の最先端』の「総括・・・道教研究の方法と課題」において展開した。

因みに言えば、王維と重玄派道教の代表的経典である『本際経』との関わりについても、今年刊行された「桃源・白雲と重玄・本際—王維とモダンな道教—」なる論考で明らかにしたところである。

申請者の現在における主たる関心は、冒頭述べた通り、白居易と李白の文学における道教思想の意味であり、そのことを通じての盛唐から中・晩唐までの道教システムの解明である。そしてこれらが解明されれば、道教重玄派の指摘も含めて、隋唐時代の道教の全体像が把握できると考えている。これが、本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、申請者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯である。

2. 研究の目的

「閑適と飄逸のタオイズム」と題して、白居易(772-846)と李白(701-762)の文学において道教がいかなる比重を占めていたかを考察する。「閑適と飄逸」は、また、「家居と客寓」という二つの人生の有り様と深く関わるであろう。「閑適」については、埋田重夫氏が「白居易研究・・・閑適の詩想」を出され、「飄逸」と深く関わる「客寓」については、松浦知久氏の名著「李白伝記論・・・客寓の詩想」がある。「家居と客寓」は、男性の二つの生き様とも言えようが、白居易と李白はそれぞれにこの人生を十分に楽しんだのではなかろうか。そして、その底流には、現世を肯定する思想、道教思想があったことを明かすのが、この研究の目的である。

(1)李白は李長之によって「道教徒的詩人」と呼ばれていることはよく知られているが、白居易はそれほど道教に深入りしていないと

いう見方が多い。しかし、白居易の文集をみると「仙」の語が少なからず見え、また、川原秀城氏も言うように「鍊丹」にも強い興味を有していたのであって（川原氏『毒薬は口に苦し』参照）、白居易と道教の関係は甚だ深いものがあるのではなかろうか。先ず、この点を明らかにしたい。

(2)李白と白居易に関する考察を点ではなく、線にするには、間に韋応物（737-795?）を介在させるのが適切であろう。拙著『隋唐道教思想史研究』の「韋応物と道教」の章でも述べたように、生卒年でも両者の中間に位置し、盛唐の道教的雰囲気の内証者と見られる韋応物は、諷諭と閑適を重んじた白居易の先駆者であり、また、茅山派道教の聖典である『真誥』からの直接的な影響関係をその詩の中に指摘することが出来る。白居易に「七篇の真誥 仙の事を論ず」（味道）とあるのは周知の事に属する。李白は茅山派道教の宗師である司馬承禎や呉筠と交渉があり、また、茅山派道教中興に与った李含光との縁もある。その『真誥』・茅山派道教との関わりの面からも研究を進めて行く。この研究を進める際、吉川忠夫氏に研究のある、『真誥』・茅山派道教に詳しく顔真卿の思想との関わりは当然注目されねばならない。

(3)道教との関係において、李白と白居易を比較する時、道教の最高神に関する問題も興味あるものである。李白は「老子」を「吾祖」と呼んで尊重し、三清の中の「太清」に盛んに言及するが、一方、白居易は「元始天尊」の讚を造り、頻りに元始天尊の居処とされる「大羅天」について述べる。元稹の白居易に宛てた詩の中には「玉皇香案の吏」の語があり、「玉皇」の典故とされることが多いが、これらも含めて、老子=老君=玄元皇帝、元始天尊等、唐代道教の最高神と白居易・李白との関わりを明らかにする。

(4)白居易と道教思想との関係について考える際、興味のあるのは、「長恨歌」に見える濃厚な道教的色彩の問題であろう。「長恨歌」では、後半で道士が海上の仙山にいる綽約たる仙子、即ち、仙女になった楊貴妃と会い、伝言を託される場面がある。玄宗が熱心な道教信奉者であり、楊貴妃が一時女冠（女道士）となったため、楊太真と呼ばれたのは事実であるが、「長恨歌」の濃厚な道教的雰囲気は、白居易の道教への共感なくしては説明できないものである。玄宗、楊貴妃と直接的な交流のあった李白の「清平調詞」等の作品と比較しつつ、この問題を解明する。

(5)白居易と李白は共に廬山に遊んだ。廬山は劉宋の著名な道士陸修静の簡寂観のあったところでもある。江州司馬時代の白居易は道士郭虚舟から『周易参同契』を授けられ、鍊丹に興味を示すなど道教に接近している。李白もまた廬山の瀑布で、銀河が九天から流れ落ちるかのような宇宙の壮大さを実感している。因みに廬山は宋代随一の詩人蘇軾も遊んだ場所でもあって、「廬山の真面目を知らないのは、その身が廬山の中にあるからだ」と甚だ哲学的な言葉も残している。これらを含め唐代道教史上の廬山の役割を明らかにしたい。

3. 研究の方法

李白の「飄逸」に対して、「閑適」は、周知のように「諷諭」と並ぶ白居易の代表的な詩のテーマでもあり、彼のプライベートな自適の境地を示す言葉でもありと見られる。

「閑適」については、前掲の埋田氏の著作のみならず、平岡武夫、花房英樹等の先達や西村富美子「白居易に閑適詩について」、川合康三氏の「白居易閑適詩攷」等々、文字通り汗牛充棟の諸業績がある。「白居易講座」七巻もその一つであるが、先ずはそれらの先行

研究を撰取する必要がある。白居易の文集には、「逍遙」の語が頻出するが、これも「閑適」の境地の解明と深く関わるであろう。また、莊子思想との関わりで言えば、当然「真」の語の用法も気になるところである。これらの観点からも白居易と道教の関係について、考察を進めていく。

- (1) 飄逸の詩人李白の女性観を玄宗・楊貴妃及び白居易の「長恨歌」に見える濃厚な道教的色彩の問題と関連させて検討する。
- (2) 「逍遙」「真」など閑適の詩人白居易に深い影響を与えた『莊子』思想に関する研究動向を検討する。
- (3) 白居易・李白の道教思想と道教史全体との関わりを考察する。
- (4) 白居易・李白と日本文学との関わりを考察する。
- (5) 白居易・李白と鶴との関係を検討する。
- (6) 白居易と老子信仰・元始天尊信仰との関わり、道教經典との関わり、音楽・舞踊との関わり、養生思想との関わりを検討する。

これら6点の検討・考察により、白居易・李白の文学における道教思想の意味を把握する。

4. 研究成果

研究成果について、やや詳細に説明する。従前から研究してきた飄逸の詩人李白の女性観を中心とした論考では、李白の詩文に登場する女神、女性道士、宮中の女性、様々な地域の女性について検討し、李白の女性観の特徴を解明した。また、日本文学に関する論文では、李白や白居易の漢詩に宮沢賢治が影響されていることを指摘した。日本道教学会の求めに応じて書いた書評二編の中、『莊子』に関するものは1000頁に及ぶ大著の書評で、精確な紹介とともに、莊子思想を政治的に捉えすぎる問題点をも指摘した。今一つは、夕

オイズムの美術、即ち、最近の道教研究において注目されてきた道教の美術に関するフランスの研究者の著作に関する書評であり、道教美術に関する日本の先行する研究が参照されていない点なども指摘した。以上が主な研究成果である。

また、白居易の道教思想については、以前から進めてきた白氏文集(『白居易集箋校』全6巻、朱金城撰)の閲読を踏まえ、最近の日本での研究を集めた「白居易研究年報」なども参考にしつつ検討した。実際に文集を読んでもみると、白居易と道教との関係は非常に広汎なもので、国家宗教としての道教との関わり、具体的には老子信仰・元始天尊信仰との関わり、儒教、仏教、道教の所謂三教論衡の問題と、個人レベルの道教に対する愛好、彼の「閑適」な生活の友としての道教に対する愛好とは、ひとまず区別して検討する必要があると思えてきた。そうした検討を経て、現在では、老子信仰・元始天尊信仰との関わり、道教經典との関わり、音楽・舞踊との関わり、養生思想との関わりなどを含んだ、白居易と道教に関する論文を構想しており、25年度中には、雑誌論文として発表することを予定している。

これとともに、道教と鶴の関係を論じた論考、即ち、白居易・李白を中心に、鶴が中国の詩文の中でどのように描かれて来たかを、先秦に遡り、魏晋南北朝の状況を踏まえて考察したものも現在、草稿段階に入っている。

なお、図書の公刊に関しては、報告者が代表者となって、19名からなる「岩手豊穰学」の研究グループを形成し、岩手大学から研究拠点形成・重点研究支援経費を交付されたことも大きな力となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 砂山稔、今、宮沢賢治とは誰かー銀河を旅する国民的詩人ー、賢治とイーハトーブの豊穰学ー、査読無、2013、9-29
- ② 砂山稔、ビジュアルな『道教の世界』を読む(書評)、東方宗教、査読無、119号、2012、69-75
URL <http://www.taoistic-research.jp/>
- ③ 砂山稔、万物斉同から塊然自生へー池田知久著『道家思想の新研究ー『莊子』を中心としてー』(書評)、東方宗教、査読無、115号、2010、65-74
URL <http://www.taoistic-research.jp/>
- ④ 砂山稔、李白女性観初探ー相思と共生ー、文化の共生に関する研究、査読無、2010、35-47

[図書] (計1件)

- ① 砂山稔、池田成一、山本昭彦 共編、大河書房、賢治とイーハトーブの豊穰学、2013、318

6. 研究組織

(1) 研究代表者

砂山 稔 (SUNAYAMA MINORU)

岩手大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：00091702

